経口摂取自立への援助から生活行動を再獲得した遷延性意識障害患者の1症例

齋藤　真理[1]、大友　昭子[1]、千葉　ひろ子[1]、小山　令江[1]、松田　供子[1]、佐藤　登志枝[1]、早川　洋子[1]、川熊　のぶい[1]、長嶺　義秀[2]、藤原　悟[3]

[1]財団法人　広南会　広南病院　東北療護センター　看護部、[2]広南病院　東北療護センター　診療部、[3]広南病院　脳神経外科

【はじめに】退院後在宅療養を希望している遷延性意識障害患者に対し、介護しやすい身体づくりと年代相応の日常生活行動を取り戻す必要があると考え、経口摂取自立への援助を主体とするナスバの新看護プログラム（以下プログラム）を実施した結果、遷延性意識障害度スコア（以下広南スコア）の著明な改善をみとめた症例を経験したので、報告する。【症例】31歳男性。受傷後3年8ヶ月経過。介入前広南スコア39点。実施前の状態は食事動作時、自助具と座ろう君を使用し30分程度なら1日1回の試験食が摂取可能であったが、ほとんど要介助であった。発語機能は呂律緩慢で言語も不明瞭であった。又、起立性低血圧と痙攣があり、思う様に離床が図れない状態であった。プログラムによる4週間の集中介入と、その後の一部ケアを継続実施した結果、集中介入終了時には広南スコアが14点にまで改善し、さらに8カ月経過した現在では7点にまで改善している。集中介入終了後も一部ケアを継続していくことで、目標としていた端座位での3食常食の摂取が可能となった。介入前は単語での意思表示が多かったが、現在は言葉のキャッチボールも出来るようになり、言語によるコミュニケーションが円滑に図れている。【考察】プログラムを実施することで考えていた以上の結果が得られたのは、4週間の集中介入が今まで見出せていなかった潜在能力を効果的に引き出すことが出来たためと考えられた。さらに一部ケアを継続することで患者に大きな変化をもたらしたものと考えられる。【結論】看護介入を行うことで、本来の生活行動を再獲得する事ができた。今後更に機能改善を目指しプログラムを継続していきたい。